

東日本大震災後の原子力事故による放射線被ばくのレベルと影響に関する UNSCEAR2013 年報告書刊行後の進展

紹介者氏名：谷 幸太郎

受理日：2016年12月13日（理事会の承認日）

<紹介文献>

United Nations Scientific Committee on the Effects of Atomic Radiation (UNSCEAR)

Developments since the 2013 UNSCEAR Report on the levels and effects of radiation exposure due to the nuclear accident following the great east-Japan earthquake and tsunami

A 2015 White Paper to guide the Scientific Committee's future programme of work

http://www.unscear.org/unscear/en/publications/Fukushima_WP2015.html

<2015年白書とは？>

UNSCEAR による福島第一原子力発電所事故後の公衆、作業者及びヒト以外の生物相に対する放射線被ばく線量の評価及び健康影響についての考察が、2013年福島報告書として2014年4月に発表された。2015年白書は、2013年福島報告書のフォローアップの結果をまとめたものであり、2015年10月に発表された。

<フォローアップの方法>

2013年福島報告書は、2012年10月末までに開示又は公表された情報に基づいて評価及び考察されているが、2012年11月以降も数多くの情報が依然として公表され続けている。2015年白書におけるフォローアップでは、2012年11月から2014年12月までの期間に主に英文学術誌で発表された297編の文献の中から、以下の項目に合致する可能性のある79編の文献が選択及び精査された。

- ① 2013年福島報告書での評価の前提となる仮定を見直す必要性を示す文献
- ② 2013年福島報告書での結論に実質的な影響を与える文献
- ③ 2013年福島報告書で特定された研究ニーズに応える文献

<フォローアップの結果>

2013年福島報告書で前提とした仮定に異論を示す文献はなく、79編のうち半数以上が、結果として仮定を支持するものであった。また、2013年福島報告書での結論に実質的に影響を及ぼす文献はなかった。しかし、12編の文献については、さらなる解析及び調査の結果によっては、将来的に仮定又は結論に影響を及ぼし得る可能性があるかと判断された。例えば、ソースタームのさらなる精緻化によって、特に避難者の線量推定値に影響が及ぼさ

れる可能性があることが指摘されている。一方、2013年福島報告書で特定された研究ニーズに大きく寄与する文献が14編、中程度に寄与する文献が23編あった。

<今後の動向>

UNSCEARは、2015年1月以降に発表された文献についてもフォローアップを続けており、今後それらの結果も発表していく予定である。